3月5日のメッセージ

聖書:ルカによる福音書 11: 14-26

「神の国は来ている」

「自分さえ良ければ」という誘惑は、私たちの想像を遙かに超えて、私たちの世界に満ちています。 十戒に「隣人のものを欲してはならない」と言われている(「隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。」出エジプト記 20:17)にもかかわらず、他人の家に土足で踏み込む者がいます。「高額のアルバイト」として人を呼び集め、財産ばかりか命まで奪う者もいます。もちろん、それぞれに背景があり、事情があるのでしょう。しかし、神が望まれる世界とは正反対の方向に世界は動こうとしているように見えるのです。

神の前から人の心が離れたとき、かつて神は大鉈を振るわれたことがあります(「神はノアに言われた。『すべて肉なるものを終わらせる時がわたしの前に来ている。彼らのゆえに不法が地に満ちている。』』創世記 6:13)。 大洪水を起こし、ごく一部の者だけを残されました(「見よ、わたしは地上に洪水をもたらし、……すべてのものは息絶える。……あなたは妻子や嫁たちと共に箱舟に入りなさい。」創世記 6:17-18)。

後に神は、二度とこのような仕方で人間と向き合うことはないと約束されました(「わたしは、……すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。」 創世記9:15)。一方的な仕方で断罪することはしないと約束されました。

しかし、結局、人間はまた「自分さえ良ければ」に戻ってしまうのです。

イエスが悪霊を追い出している時、イエスによって心揺さぶられた者たちがいました。本来、心が揺らぐ時は、新しい自分と出会うチャンスです。なぜ揺れているのかと、自分と向き合い、自分と対話し、他者と対話し、新しい道を示されていくこと。これが私たちの成長につながっています。

しかし、この場面、人々は自分の既得権益が失われることを恐れました。イエスと対話しようとせず、一方的に自分の価値観でイエスを断罪しました(『あの男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している』と言う者や、イエスを試そうとして、天からのしるしを求める者がいた。」ルカによる福音書 11:15-16)。

彼らに対するイエスの言葉はもちろん手厳しい(「わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出すのなら、あなたたちの仲間は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたたちを裁く者となる。」ルカによる福音書 11:19)。 だが、同時に、深い愛も感じるのです。

「しかし、わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。」(ルカによる福音書 11:20)

あなたたちは未だ「自分さえ良ければ」という次元にいる。「にもかかわらず」、神はすでにあなたたちの間に来られている。全ての者が大切にされ、それぞれの個性が尊重される世界はすでに来ている。だから、早くこちらへ来なさいと呼びかけているように聞こえてくるのです。

多様性の大切さが謳われながら、一向に社会は自分を変革しようとはしないという現実があります。 もちろん、ここで「私たちだけが正しい」と言ってしまえば、それはまた、「自 分さえ良ければ」の次元に自分を堕とすことになるでしょう。私たちも自分自 身を吟味する必要があります(「愛する者たち、どの霊も信じるのではなく、神から出た

そして、その上で、理不尽なこと、正しくないことに対しては、明快に「ノー」と言える私たちでありたいと思うのです。

「神の国は来ている。」

霊かどうかを確かめなさい。」 ヨハネの手紙一4:1)。

この事実が私たちの背中を押します。神は勇気をもって踏み出す私たちを守ってくださることでしょう(「主よ、わたしの神よ、救いの力よ/わたしが武器を執る日/先頭に立ってわたしを守ってください。」詩編 140:8)。

